

新発田歩兵第百十六聯隊奮戦記

【第12回】最終回

元新発田駐屯地援護室 佐藤 和敏

歩兵第百十六聯隊奮戦記も第十二回目に達しました。ここでの聯隊歴史紹介は「白壁兵舎広報史料館」に保管されている「新発田聯隊史」及び「聯隊歴史・歩兵第百十六聯隊」（手書きの部隊歴史原本）を元に紹介してきましたが、この聯隊歴史・歩兵第百十六聯隊は、昭和十六年の長沙作戦（第三代村井聯隊長時代）で終了しており、その後終戦までの歴史の記録は見当たりませんでした。

「新発田聯隊史」（昭和五十九年十月発行）に於も途中までしか記載されておらず、以降調査中ということで終わっています。

何処かに記録はないかと調べたところ、昭和四十九年五月に原書房発行の有料本(当時二千五百円)「歩兵第百十六聯隊概史」大坪進編著が見つかりました。大坪氏は第五代聯隊長を就任され帰還。歩兵百十六聯隊の終戦までを十数年の長い年月を要し一冊の本にされ発行しました。従って長沙作戦以降も詳しく記述されています。

しかし既に有料出版されている内容となる為、著作権の問題もあり紹介出来ません。このような関係から「新発田聯隊史」に於いても昭和十六年以降終戦帰還までの歴史が空洞になっているものと思われます。誠に残念ではありますが、ここで終了することになりました。

最後に、「六三会」（旧歩兵第百十六連隊第三大隊の略称）が「歩兵第百十六連隊第三大隊概史」（昭和六十一年十月発行・非売品）を作成し旧史料館に寄贈されています。

その中で、戦時中復員帰国された方々は別として、戦争終結とともに軍の行動等の記録類一切を命により処分。更に引き揚げの際、私物検査は厳重との達しに基づき、日記、手帳類から写真に至まで制限を受けたために切取り焼却した。一人の不注意から部隊全員の乗船に迷惑のかかるのを恐れてのことであった。当時の心境として生き残った全員が早く帰国して、復興のため、更には不運にも戦没された戦友の墓参りが第一の任務と考えていた。

敗戦国が立直ることなど我々の時代では望めないと考えていたが、戦後二十年を過ぎた頃から飛躍的に経済大国にまで復興してきた。

反面我々戦友もいつしか壮年期を迎え、不幸にも亡くなる人が一人また一人と増えつつ、お互いが老境に入りかかる年代を迎えた。

この頃から、せめて概史でも作成して、戦友が集まるたび空白部をうめる方式を取れば必ずや子孫に残す戦争記録も出来ることを確信したとある。

この様な経緯から作成された第三大隊概史の中から、長沙作戦以降を紹介し、歩兵第百十六連隊奮戦記を終了致します。

「歩兵第百十六連隊第三大隊概史」

【太平洋戦争】

昭和十六年十二月八日（月）午前七時、臨時ニュースが発表された。筆者は東部第二十三部隊、神田隊の召集兵で、朝の点呼の際に伝達を受けた。

「大本営陸海軍部午前六時発表、帝国陸海軍部は本八日未明、西太平洋においてアメリカ、イギリスと戦闘状態に入れり」。此処に太平洋戦争が始まった。

昭和十七年一月内地からの補充部隊、紫金嶺にある連隊本部到着。大部分は既教育兵であったが、昭和八年徴集の兵が若い組で、他は老兵が多数であった。軍旗奉拝後、連隊長・村井権治郎大佐の訓示を受け各隊に配属された。

【宜昌周辺の警備】

（昭和十七年三月十六日～十月三十日）

湖北省宜昌県に於いて、第三大隊主力は宜昌西陵山陣地の警備、本部は西陸山に位置し、連隊本部は紫金嶺にあり同地区の警備。

五月、阿久刀川大隊長は転出され、後任として連隊副官・佐々木久雄大尉第三大隊長として着任された。

十月末、内地からの補充部隊が連隊本部に到着した、当時連隊主力は警備地の移動により掇刀石に本部を置き、第三大隊本部は老街に移動中であった。

十一月五日、連隊本部は掇刀石に、第三大隊は老街附近に位置し、各地区ともに地区の掃討を行い治安維持の任に当たる。

十二月一日連隊長の更迭の命あり。三代目連隊長・村井権治郎大佐、少将に進級され、京都連隊区司令官に転補されることとなった。

十二月、後任連隊長として新井花之助大佐が着任された。

十二月下旬に至り、軍の編成替え等のため、連隊は歩兵団長・多田少将の指揮に入り、荊門以北地区の警備を担当することになり、連隊本部は子陵舗に移り、第三大隊は歩兵団の予備隊として、荊門及び其の附近に位置し、治安の任に当たることとなった。

【江北作戦】

(昭和十八年二月十六日～三月十六日)

本作戦は平坦にして豊沃なる水田地帯の江北に蟠踞する大部隊の敵を急襲して撃滅する目的であった。この地帯は湖沼・細流が多く、道路は概ね堤防上に限られ、敵は要所に堡壘を設け大堡壘だけでも八十余はあったといわれている。

大隊は普濟觀の敵の攻略を命ぜられ二月十六日に同地に集結し、十七日の朝から戦闘を開始したが、敵は城壁の銃眼を利用して狙撃し、我が大隊は全火器を集中して攻撃し薄暮漸く城廊の一部に突入し遂にこれを占領した。この戦闘において、大隊本部・石田曹長が戦死された。

普濟觀を占領後、大隊は師団命令に基づき、第二の目標・机頭河に向って前進。途中敵を駆逐しながら、周老阻を経て二十二日、黄家湾の堡壘に達し攻撃を開始した。正面攻撃は不利のため背面に迂回して重火器支援のもとに猛攻を加え、特に第十一中隊の必死の切り込み隊が堡壘の一角を占領したことから、敵も戦意を失い遂に白旗を揚げ降伏するなど多くの戦果を挙げて机頭河に突進した。

この附近の敵はわが軍の攻撃を受け、既に戦意を喪失しており、四分五裂の有様で多くは投降して来た。

軍は最後の目的地である峯口に進出。大隊も師団主力とともに二十七日峯口に到着したが、敵は既に戦力尽き、師長以下参謀までことごとくわが軍の捕虜となるなどの状況であった。

師団が峯口に到着する頃、後方白露湖附近に敵の大部隊が集結中の情報に接し、師団は直ちに反転することになり、大隊は師団主力となって各地区を掃討、難行軍を続けて三月一日新溝咀に到着した。

大隊は新たに師団命令により北掃討隊となり、一日、日没後行動開始し、東湾～老新口～白魚嘴に沿う地区を前進し、二日払暁白魚嘴附近に達したが、わが師団に包囲された敵は戦意なく、便衣（ふだん着）となって降伏して来たので戦闘もなく、大隊は小河口附近に集結して警備についた。

第十二中隊は師団命令により捕虜及び戦利品を水路で沙市に輸送する任務につき、大隊主力は多田少将の指揮下に入り、本部及び第十一中隊を小河口、第九中隊を張金家、第十

中隊を竜湾附近に配置して、約十日間同地附近の掃討に当たった。

江北の地区も概ね平定し、多大の戦果を挙げて、部隊は一旦沙市に出て原隊に復帰したのは三月十六日頃であった。

【尖南作戦】

(三月二十二日～二十八日)

【塩北作戦】

(三月二十九日～四月五日)

【江南作戦】

(昭和十八年五月九日～六月十六日)

宜昌附近にあった一万数千トン余の船舶を、自由に揚子江を下航させる目的をもって、本作戦（第一大隊欠）は開始された。

漁洋関に突進した部隊は、漢洋河に架かる橋梁が焼却中にもかかわらず強行渡河し、突入したが、同時に待ち構えた敵の一斉射撃を受け、第十中隊、第十一中隊の強行渡河でようやく之を駆逐、漁洋関を完全に占領したのは二十二日夕刻であった。

漁洋関に進出した連隊は、師団命令により追撃を敢行、二十四日早朝には都鎮湾附近の敵を強襲して占領、清江対岸には敵布陣しありて渡河は容易ではなかった。

二十五日、ようやく捜し求めた少数の民船を利用し、掩護の火力配置のもと第九中隊を先頭にして渡河を強行したが、大雨あり渡河は難航した。しかし第一線部隊の果敢適切な戦闘により遂次渡河し、完了したのは二十六日の夜であった。

第三大隊は天桂山北側地区に突進を命ぜられ、あらゆる困難を克服して之を占領した。

五月二十八日、天桂山北側地区に進出した連隊は、更に木橋溪に突進を命ぜられ、両河口附近では岩と岩をはさんで手榴弾で交戦するなど、前進困難のため迂回して木橋溪に進出しようとしたが、渡口北側高地から手厳しい敵の反攻を受けた。紅花岑附近に達すると又々敵の反撃に遭い、これを突破するため多くの犠牲者を出すに至った。

木橋溪宇金に進出した連隊は、更に北進すべく準備中、二十九日命令により宜都に向かって反転することになり、附近の残敵掃討の後三十一日未明から反転を開始した。

連隊の行軍は大きな支障もなく、六月二日宜都附近に遂次集結し、揚子江渡河の準備をしつつあったが、突然十数機の敵機の来襲を受け、数十名の戦死傷者を出し、連隊長・新

井大佐も右肩に貫通銃創を受け負傷した。

爾後第三大隊長・佐々木少佐が連隊長代理となり、大淵中尉が第三大隊長代理を務めた。

歴戦の連隊長代理はよく部隊を操縦して適切な戦闘を行いつつ、六月二十日頃原態勢に復帰、連隊は荊門地区に、本部は子陵舗、第三大隊は涪溪河附近の警備を実施した。

七月二十日、第五代連隊長・大坪進大佐着任される。

【常德作戦】

(十月二十七日～十二月二十九日)

第二・第三大隊は留守部隊となって、荊門附近の警備に任じていたが、十一月二十日から十二月六日の間に敵の反攻があり、執拗に攻撃を繰返して来る敵を、我が守備隊は貧兵且つ孤立しながらよく頑張り、留守部隊の任を全うした。第三大隊本部及び各隊に犠牲者が相当あった。

十二月二十日以降、昭和十九年三月までは、おおむね原態勢で警備に当たった。

一月、第三大隊長・佐々木久雄少佐、独立歩兵第六旅団副官として転出、後任・渡辺良雄大尉着任。

【第一次湘佳作戦】

昭和十九年三月に入って、南支に対する進攻計画が確定し、第一次湘佳作戦の構想が披瀝され、極秘裡に準備するよう指令を受けた。

この内意を受けた各部隊は、転進の目的を示されることなく着々と警備地撤退の準備を開始した。

三月十五日、輜重兵第十三連隊より多数の転属者を迎え、本部駄馬隊は名称一括「行李」として十一個分隊及び指揮班を置く編成をなし、出動態勢準備を整えた。

四月に入って準備も進捗し、当面の警備を第三十九師団と交代、長期間にわたる部隊移動作戦として個人の身辺も不用のもの一切を梱包し、公用書類も将校行李も全て後送する事になり、戦闘に必要な物資運搬用駄馬の徴発、大小行李の整備等に万全を期した。

四月十八日、部隊は行先を明示することなく荊門附近を夜行軍で出発した。途中、蔡甸附近で三週間ほど駐留し訓練をかさね、崇陽附近に集結した。

六月作戦開始、連隊の行動概略によれば、長寿街～永和市～大空舗～醴陵～萍郷～安仁

～来陽等に転戦とある。

萍郷突入の際五里亭に達した頃、不意に横合いから敵が出てくるのに遭遇した。夜間で細部の敵情は不明のため統一射撃も出来ないまま天明を待った。

敵は左側高地を占領しており、天明とともに逆襲して来た。尖兵中隊であった第十二中隊は、敵の真ん中にいて苦しい立場にあった。

この夜間遭遇戦に各隊ともに混乱し、歩兵砲小隊、第十二中隊、第三機関銃中隊等に多数の戦死傷者を出した模様だったが細部は不明であった。

二十八日天明時、安仁附近に到着した連隊本部は、第三大隊に対し攻撃を命ずると共に、連砲、山砲を陣地に着けこれを支援することとなり、大隊長は先ず第十二中隊を敵陣の左要点に向わせ、これを奪取するや、大隊本部も猛火を冒して台上に登り、次いで第十二中隊をその右に、第十一中隊には更にその右の要点を奪取させようと全力を挙げて盛んな攻撃を開始し、わが火砲の支援射撃の下に敵陣に緊迫、苦心惨憺の末遂に白兵戦を演じて敵を撃破したが、午前中からの戦闘は日没に及び、この間先頭に立って奮戦中の第十一中隊長・大岡中尉、第十二中隊長・白山大尉相次いで戦死し、第十二中隊小隊長・時田少尉は負傷しながらよく中隊を指揮し、抜刀しつつ敵陣を奪取した。

この戦闘で二名の中隊長のほか、多くの戦死傷者を出しているが詳細不明である。

七月三日未明、連隊主力は来陽城を無血占領。大隊は来陽南方小水舗附近で八月九日頃まで防御戦闘。

第三大隊前面の敵情に対しては、陣地構築の間大きな動きもなかったが、七月十四日頃より敵の動きも大きく、圧倒的大兵力で再三来攻して来た。大隊主力は防戦に努め、辛うじて陣地を保持していた。

七月十八、十九日、東進中の海福部隊が進出して、東方より来攻する敵を撃払ったが、陣前になお残留する敵もあり、積極的にこれを掃討中第十一中隊、第十二中隊に犠牲者を出したほか、この防御戦闘では各隊が相当の損害を受けた模様だが詳細は不明である。

八月十二日～二十九日松柏、北田町附近に滞在。次期作戦準備。

【天子嶺附近の戦闘】

九月一日、洪橋会戦を全県へ突進途中、天子嶺附近における戦闘で各隊に対し戦闘指揮の最中、第三大隊長・渡辺良雄大尉は敵の一弾に当たり戦死されるなど大きな損害を受けた。同日、連隊本部付きの大淵大尉が第三大隊長代理として着任、じ後の指揮をとられた。

駐留が落ち着くに従い、太平洋方面の戦況を耳にするようになり、新鋭重慶軍の反攻も予想され、各隊は陣地構築を実施すると共に岩山地帯での戦闘訓練に力を入れていた。

竜頭の部落は谷あいの寒村で周囲は岩山がそそり立ち、南面によくある山々の景色のようであった。

四月、大坪連隊長、南京の幹部候補生教育隊長として離任。後任は第十一軍高級副官であった岩下栄一大佐であった。

【都安作戦】

(昭和二十年四月十六日～五月三日)

都安附近にある優秀装備の敵を包囲殲滅し、その戦闘意識を喪失させる目的をもって、第三、第十三師団が敢行した作戦であった。

連隊は一部を現警備地に残し、主力は四月十六日夜行動を開始、宜山西南方の集結地に向った。連隊の行動開始は二十日日没後からであった。

岩山地帯の人家もない不毛地帯の行動であり、将兵の疲労は並大抵でなく、特に馱馬部隊は落鉄したり、砲身や弾薬を人力搬送するなど散々の苦勞であったが、遂に都安附近に至るまで敵と遭遇することなく進撃した。所期の目的は達し得なかったが、敵に強圧を加え次の反転作戦を容易にしたとして、各部隊も五月五日頃までにそれぞれの警備地に復帰した。

【反転作戦】

(五月二十日～六月十七日)

太平洋方面の戦局が重大となって、沖縄に次いで上海、または山東地方に米軍の進行が顧慮され、我が精鋭部隊を該方面に転進させるため、反転の命を受け行動を開始した。

第二大隊は二十日夜、先遣隊として出発。主力は二十一日日没頃、第一大隊・聯隊本部・直轄部隊及び第三大隊の三梯団となって四把壚を出発、途中小敵を排除しながら、険峻な僻地を苦勞しながら桂林に向って行軍した。桂林郊外に到着したのは六月一日頃であったが、滞在数日にして新寧附近の警備の任を受け、十四日軍公路に沿って北上し、溪谷の山道を登り行軍に難渋しながら、ようやく新寧附近に到着し警備の任についた。部隊当面の敵情は比較的平穩であった。

聯隊は八月一日以降、新寧から撤退の命を受けて、七月三十日、一部を先遣、主力は三十一日、日没後隠密に第一線部隊の撤退を開始、敵機を避ける為に連日夜行軍を実施、暗夜黙々の行軍であった。

【終戦】

八月十六日、洪橋附近に達し宿泊中、師団より重要電報に接し、暗号係の慎重な解読により「我国は八月十五日ポツダム宣言を受諾し、軍は大命により直ちに戦闘を中止する。後命を待て」という。この命令を知った隊長以下の驚きは大変であったと想像された。

八月十七日以後は、落着かぬ毎日であったが、師団・総軍から発せられる命令や訓示が次々と伝達されるに従い、将兵の気持ちも落着いて来た。

【軍旗奉焼】

八月二十二日、連隊は衝陽以北に集結することになり、現武装のまま二十三日宿营地出発。軍公路を衝陽に向った。二十六日夜遅く三板橋西南方一キロの果坪に到着、部隊はその周辺地区に宿泊した。

約四千名の将兵が軍旗はためく下に、上海に上陸以来九年間、歩兵第百十六連隊のシンボルとして戦線を駆巡り、常に部隊の先頭に立って突き進んでいた軍旗も、終戦と共に国家と運命をともにするかのようになり、昭和二十年八月二十八日、中支湖南省果坪の地で奉焼することとなり、連隊長は当日連隊の将兵全員を集めて厳粛な軍旗決別式を挙行された。

当日は一日中曇天、参加した将兵、残留した将兵いずれもが晴れやらぬ一日であった。軍旗は連隊長、副官、旗手、各大隊長立会いの上、同日夕刻奉焼された。

【抑留地集結】

八月二十八日軍旗奉焼。抑留地への行軍。

九月初め頃、九江飛行場で中国軍に武器、弾薬等の武装を譲渡、以降抑留地への行軍であった。十月八日江西省湖口地区に集結。第三大隊の集結した場所、地名は不明であったが、後で知ったのは彭次県高尾附近の農村であった。取りあえず民家の一部を借り宿営した。住民は純朴で日本兵に対しては種々協力、同情の面が強く感謝のほかなかった。

連隊からは抑留期間も長期となる予定とのことで、宿舎構築を開始、完成までの間は民家に宿泊しての作業であった。宿舎構築の材料収集も容易でなく、最小限の丸太を利用、骨組みとし、藁、茅、枯れ草等を集め、不便ながらも雨露をしのぐ宿舎を完成した。不便このうえないが、早く日本に帰るまでの辛抱であるという心境で頑張った。

【抑留地の生活】

抑留期の軍律行動等は、従前の通り厳正であった。先ず健康が第一と起床、点呼体操から一日の日課は進められた。時には運動会も開催された。娯楽とて何もない場所ではあったが、創意工夫の楽器を作って楽しんでいった。

演芸会等も開催してお互いがお国自慢を披露されて長かった戦陣の苦勞を忘れるひと時もあった。

精神教育の面では特に意を用いられ、連隊長の駐留間の心得等の指示事項、大隊長の訓話等あって厳正なる日常であった。

【昭和二十一年】

一月、抑留地で新年を迎えた。中国の正月は二月であった。爆竹を鳴らして戦勝と正月を祝う現地中国人の顔は明るかった。

抑留生活も既に半年を過ぎた頃、上級部隊の内地帰還が始まったとの連隊からの連絡のあった頃、三月五日連隊将兵全員集合のうえ、連隊創設以来、大陸に於いて散華された英霊に対し、大陸最後の慰霊祭が施行された。

五月二十五日、内地帰還のため湖口出発。六月八日、上海出帆。第三大隊新井大尉以下約六百名（大隊長、上海残留）十五日、山口県仙崎港上陸。同日、第三大隊は召集解除、同日は宿舎で一泊、故国の一夜を過ごし、復員列車に乗車、故郷へと向った。

連隊主力は六月十六日、上海を出帆、二十七日、佐世保に上陸、召集が解除された。

【軍旗の復元及び奉呈】

昭和十二年九月十六日、勅語「歩兵第百十六聯隊ノ為 軍旗一旒ヲ授ク 汝軍人等協力同心シテ益々威武ヲ宣揚シ我帝国ヲ保護セヨ」と共に畏くも大元帥陛下より親授された軍旗も、終戦と共に奉焼を余儀なくされた。

昭和四十五年頃から、東京百十六・東京六三会等の集まりで、軍旗復元の募金活動が開始された。復元後は新発田駐屯地史料館に奉呈することに決し、東京松坂屋で謹製、同年秋には完成した。この秋、東京百十六会が主催して、靖国神社で旧百十六聯隊の戦没将兵の慰霊祭が挙行され、復元された軍旗を先頭に多くの戦友が神前に参拝された。

現在、復元された歩兵第百十六聯隊の軍旗が、新発田駐屯地「白壁兵舎広報史料館」に展示されていますが、この軍旗は昭和四十六年十月十三日、駐屯地営庭に於いて旧百十六聯隊関係者七十名の来隊のもと、「軍旗奉呈式」が挙行され、歩百十六聯隊第五代元聯隊長から当時新発田駐屯地司令であった江口一佐に贈呈され、式典終了後史料館に収められたものである。